

# ダン・タイ・ソン ピアノリサイタル

1 部

高雅で感傷的なワルツ……………ラヴェル  
ソナチネ……………ラヴェル  
亡き王女のためのパヴァーヌ……………ラヴェル  
水の戯れ……………ラヴェル  
ラ・ヴァルス……………ラヴェル

2 部

ソナタ 全6曲……………スカルラッティ  
ヘ短調 K466/L118 ト長調 K547/L28 ロ短調 K27/L449  
ト長調 K454/L184 ニ短調 K213/L108 ニ長調 K96/L465  
ノクターン 変ホ長調 Op.55-2……………ショパン  
ノクターン ハ短調 Op.48-1……………ショパン  
ポロネーズ 第2番 変ホ短調 Op.26-2……………ショパン  
ポロネーズ 第6番 変イ長調 Op.53「英雄」……………ショパン

冬

## 四季<sup>2014</sup>コンサート

2014年12月2日(火)18:15開場 18:45開演  
会場:浜松市教育文化会館  
主催:浜松音楽友の会

### プロフィール

ハノイ生まれ。1980年、ショパン国際コンクールで数々の特別賞とともに優勝を果たし、アジア出身のピアニスト初の快挙として大きな注目を集めた。以降、リンカーン・センター（ニューヨーク）、サル・プレイエル（パリ）、ムジークフェライン（ウィーン）など世界40カ国以上の檜舞台で活躍を続ける。レニングラード・フィル、モントリオール響、BBCフィル、バーミンガム市響、ブラハ響など世界のトップ・オーケストラと、またマリナー、ヤンソンス、オラモ、スピヴァコフなど名指揮者らと共演している。来日公演でも、2002年のサカリ・オラモ指揮バーミンガム市響、2004年ジョン・ネルソン指揮パリ室内管とソリストとして帯同、そして近年では2011年秋にバーヴォ・ヤルヴィ指揮パリ管弦楽団とはパリと東京で共演し、高い評価を得た。

今後の活動としては、2015年にロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、サンクトペテルブルク交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、サンパウロ市交響楽団との共演を予定している。また、ワルシャワでの第17回ショパン国際ピアノコンクールの審査員も務める。

CDはドイツ・グラモフォン、ソニー、ビクターエンタテインメントなどから数々の名盤をリリース。2008年には、フランス・ブリュッヘン指揮18世紀オーケストラと、エラール・ピアノを弾いたショパン協奏曲集（キングインターナショナル）をリリースし話題となった。2010年にはショパンのマズルカ全集（ビクター）をリリース。現在カナダ在住。

はまホールファイナル 特別コンサート

ダン・タイ・ソン  
ピアノリサイタル



DANG THAI SON  
PIANO RECITAL

写真: 佐藤寛敏



●モーリス・ラヴェル(1875~1937)／高雅で感傷的なワルツ

ダンディのもとで保守化していた国民音楽協会に対抗するため、ラヴェルはケ克蘭らと1910年、新しい音楽の擁護と埋もれた才能の再発見を目的に独立音楽協会(SIM)を創設した。その翌年、SIMの演奏会のために書き上げられたのが本作である。シューベルトのワルツ等を意識しながらこの作品に向かったと伝えられており、全曲は短い7つのワルツが切れ目なく演奏される。

●M.ラヴェル／ソナチネ

当時フランスで発行されていた音楽雑誌主催の作曲コンクールがあり、その応募曲として1905年に作曲された。応募規定によって小節数が制限されていたため小規模となったが、ラヴェルらしい精緻な響きと優雅な情緒が、古典的な形式に沿って簡潔にまとめられている。3楽章構成。

●M.ラヴェル／亡き王女のためのパヴァーヌ

パリ音楽院に在籍していた1899年に作曲された。ボリニャック公爵夫人のサロンに顔を出していた頃で、夫人に依頼され、献呈された。「パヴァーヌ」とは16世紀のスペインに起源を持つ宮廷舞曲であり、孔雀(Pavo)が羽を広げて佇むような、威厳に満ちた風情でゆったりと踊られる。なお「亡き王女」は特定の人物を指している訳ではない。

●M.ラヴェル／水の戯れ

やはり音楽院に在籍していた1901年に書かれ、古典的な形式と光と影の効果が鮮やかに融合した作品となっている。水が刻々と変化していく様態を見事なまでに描写しており、また高度な技術が要求されている。

●M.ラヴェル／ラ・ヴァルス

「ラ・ヴァルス」とは、フランス語でワルツのこと。ラヴェルが管弦楽のためのワルツを着想したのは1906年頃で、それは前述の「高雅で感傷的なワルツ」となり、さらに、シュトラウスのオマージュとして1920年頃に書き上げたのが、管弦楽のための舞踊詩「ラ・ヴァルス」である。ラヴェルはこの作品を、ロシア・バレエ団の創設者ディアギレフに示したが、舞踊に不向きという理由でディアギレフは拒否、以来2人は不仲になったという。ピアノ版は、2台ピアノ版とともにラヴェル自身の手によるもので、煌めくような色彩と官能の洪水が押し寄せる。

●ドメニコ・スカラッティ(1685~1757)／ソナタ 全6曲

ドメニコ・スカラッティは、バッハやヘンデルと同年、オペラ作曲家の父をもってナポリに生まれた。その後音楽教師として仕えていたマリア・バルバラ王女がスペイン王家に嫁いだためマドリッドへ同行、そのまま同地で生涯を終えた。作曲家としての軸は何と言っても555曲に及ぶピアノ(チェンバロ)・ソナタ。これらは殆どが単一楽章、二部形式という小規模な作品であるが、イタリアの耽美的な旋律やスペイン情緒など驚くほど豊富な音楽的内容、両手の交差、不協和音等、斬新な技法が盛り込まれている。校訂者によって、代表的なカークバトリック(K)番号とロンゴ(L)番号など、何種類かの分類がある。

「ヘ短調 K466/L118」は静謐ながら計り知れない哀愁に満ち、敬虔な祈りのよう、「ト長調 K547/L28」は軽やかに躍動的、印象的なメロディーだがやや陰りがある。「ロ短調 K27/L419」は細かく速いパッセージから気品あるロマンが立ち昇り、「ト長調 K454/L184」は典雅で優美、貴族的気品に満ちて舞曲的でもある。そして「ニ短調 K213/L108」はゆったりとした流れの中でモノローグのように清冽、「ニ長調 K96/L465」は音階的な細かいパッセージが情熱を持って疾走する。

●フレデリック・ショパン(1810~1849)／ノクターン 変ホ長調 Op.55-2 ノクターン ハ短調 Op.48-1

ノクターン(夜想曲)は、アイルランドの作曲家フィールドが創始した様式で、静かな伴奏の上に叙情的な旋律が重ねられていく夜の音楽である。当時大ピアニストとしてもヨーロッパで君臨していたフィールドをショパンは敬愛し、その様式を自らの創作に採り入れた。けれどもフィールドのノクターンが穏やかに流れていくのに対し、ショパンのそれはロマンティックのみならず、あくまで古典的な構成観に根差した緊密な構造を有している。

2曲で構成される「Op.55」は、ジョルジュ・サンドの長男モーリスとの確執が表面化し、苦悩していた1844年に書かれ、「Op.55-2」には香り立つような情感と即興曲風の雰囲気が見えられている。同じく2曲からなる「Op.48」は1841年の作。「Op.48-1」は高貴にして重厚であり、ひとつの新しい境地を示している。

●F.ショパン／ポロネーズ 第2番 変ホ短調 Op.26-2 ポロネーズ 第6番 変イ長調 Op.53「英雄」

ポロネーズは、マズルカと並ぶポーランドの国民的舞曲である。男女がペアになってゆっくりと歩いて周回する3拍子の踊りは高貴な雰囲気を持ち、ヨーロッパ各国の宮廷に取り入れられて急速に広まった。ショパンが書いた最初の作品がポロネーズであり、マズルカが絶筆であることは実に象徴的だ。

「第2番」は1835年頃、パリで書かれた。故国ポーランドに対する暗澹たる憂慮が漂う、舞曲の範疇を超えた芸術的なポロネーズである。ショパンは自作にタイトルを一切付けなかったが、1842年に完成したポロネーズは力強さと躍動感を前面に押し出した勇壮さから、「英雄」の愛称で呼ばれている。ピアニスティックかつダイナミックな傑作である。